

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の 教育

2
2008



幼児の教育

第107巻 第2号



乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第107巻 第2号

もくじ

巻頭言

4

幼児教育において「遊び保育」は本当に可能なのか

小川博久

「共にある」ことをいかに支援できるか

成田信子

運動発達を阻害する運動指導

杉原 隆

観察者と保育者の対話 (11)

吉村 香・海宝里咲

六人の地域の宝が集う場所

金澤妙子



保育者になつたころ (6)

「幼児の生活はあそびである」

堀合文子

保育の現場から

あかずきんごっこを楽しむ中で

篠澤恵理

子どもと保育の情景 (14)

「いいこと、いいこと、考えた！」

戸田雅美

発達心理学者の子育て奮戦記 (2)

笑顔

長田瑞恵

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (14)

保育者が伝える「保育実践論」

田中三保子



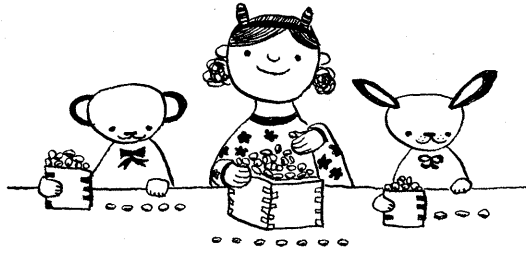
幼児教育において

「遊び保育」は本当に可能なのか

小川博久

幼稚園教育要領の改訂において「遊び中心の保育」の重要性が今回確認されるとすれば、幼少の関連が重視される状況の中で、幼児教育の独自性が確認されたことになり、安堵すべきことだと思っている。

しかし、よく考えてみれば、この安堵は一瞬の思いでしかないとも思う。なぜなら、幼児の遊びを尊重するとか大切にするということは、考えてみればみるほど、簡単に了解できることではないからである。事実、教育要領の文言とは裏腹に、幼児の遊びは、実態としても、われわれの日常的現実から姿を消しており、建前とは別に、大人の知識を教授したがる人たちが教育関係者の中にも増加している。そして「遊び」といわれる文化さえも、教えなければ伝わらないと信じる保育者も多いのである。逆に、子どもの遊びに干渉すべきではないとする原則を盾にとつて、放任をほしのままにし、結果として「真面目な」教育関係者のひんしゆくをかってしまう例も少なくないからである。



今夏、スウェーデンのウプサラ大学で教育学者たちと「遊び研究のセミナー」をもったとき、欧米の研究者間で著名な遊びを研究している社会学者がフィールド・ワークで幼児のごっこ遊びの研究事例を極めて実証的に報告していたのには、感心させられた。その反面、それらの事例報告が、遊びの仲間の中でどう主導権を取るか、好きではない仲間をどう遊びから排除するかといったものであることに疑問を覚えた。たとえば、ある女の子が、一緒に遊びたい相手には「あなたと、私は同じ年で生まれたのね」と言い、遊びたくない幼児には、「でも、あなたはまだ生まれてなかったのよ」といった言い方で排除しようとするのだという事例であった。確かに、こういう事例はあるだろう。しかし、保育者の立場からすれば、遊びはまずは楽しいものであり、楽しさを共有することでますます人間関係が豊かになっていくものである。楽しさの共感や、そして時には、つらいという気持ちの波長を共有することこそ、遊びを見るまなざしであり、援助であろう。もちろん、そこに前述の社会学者が認める現実があるとしても、ここには、大人と子どもの区別を越えて共感する世界がある。今、そのことができる大人が少なくなっている気がしてならない。子どものころ、遊ぶ楽しさを知らなかったり、忘れてしまっている大人が増えていくからである。

こんなことを考えていると、保育の中で遊びを尊重するという言葉の困難さがあります大きくなっていく。『遊びの現象学』（勁草書房）を著した西村清和はぶらんこで遊ぶことを例にとつて、「遊び」の本質は緊張と解放の宙づり感を味わうことだと述

べた。幼稚園の砂場には人生経験のすべてが詰まっていると、フルガムは言っている。こうした遊びのとらえ方は、学校で教えることと、大きく異なっている。近代学校は大人の社会の望ましき価値を教えることを基本としている。良き価値を子どもが学んだかを見極める仕事教育評価である。中央教育審議会の委員で幼児教育を専門にしているある心理学者が、教育評価が困難なことを理由に遊びを幼児期に取り入れることに疑問を呈していた。この反応は、小学校教育の立場からの遊びへの疑義であることは明らかである。しかし、良き価値への到達度をより明確にしようとする学力テストによって、子どもたちの成績を数値上に配列化する学校文化が学校社会を支配することは、子ども社会を幸福にするだろうか。地位の高い人が必ずしも良きことをするとは限らず、むしろ、その人たちこそ世の中に悪事が通用するという悪臭を振りまいていて、子どもたちも確実にそれをかいでいる昨今、学校文化だけが建前として、良き価値だけを教える場であるとして涼しい顔をしていられるのであろうか。結果として、欺まんをさらすことになっていないだろうか。

学校が子どもたちに人生を学ばせる場になることができると思う。もし、学校の中で遊びが子どもたちの文化として育つことができれば、学校は子どもたちに人生の楽しさとつらさを擬似的に体験させてくれる場になると思うのである。キャサリン・ルイスは、日本の同窓会に注目し、日本の小学校の学級文化を高く評価した。私にとつて、成人して小学校時代の級友と会うのは楽しいことだ。それは、成績の上下があ



り、時にけんかの思い出もある中で、懐かしさの源泉が遊び体験にあったと思うからである。その思い出だけは消えていないからである。

鬼ごっこで追いつ追われるスリルを味わいつつ、つかまえない、つかまえたくないという緊張の中でつかまえた（つかまえられる）瞬間の解放感、鬼と子の間に潜在している仲間意識（親しさ）の感覚のゆえである。このアンビバレンツな経験こそ遊びの楽しさである。近年、運動会の騎馬戦で敵の騎手の防止を激しく奪い合わず、お互いに逃げ合って、残る帽子の数を競い合う姿を見るにつけ、遊びの楽しさを共有し合わない若者たちの希薄な人間関係を悲しく思うのである。それに引き換え、昨夏の全国高校野球選手権での佐賀北高の優勝は、普通の県立校の優勝ということで、野球を楽しむ高校生にとって人生を学ぶ良い機会になったのではないだろうか。私のフィールドにしている幼稚園で、お互いに張り合っている五歳男児がボス同士として激しい口論でけんかをしていた。数十分後、バツの悪さに口はきかないけれども、いつの間にかお互いに気づかずに自然と接近し合っている姿があり、とても印象的であった。全く接触しなくなるのは寂しいのではないだろうか。幼児の遊びが、楽しさも、時に悲しさも味わいつつ、仲間であるという集団規範を身につける大切な機会であるとするれば、そうした人生経験的体験が身につく営みとして、遊びを保障し、共感する保育者をどう養成できるのだろうか。それが私の悲願であり、課題である。

（聖徳大学）

「共にある」ことを いかに支援できるか

成田 信子

中学生と四歳児と五歳児と

「中学生が幼稚園で手話を教えます」と案内をもらって、九月のある日、万博公園の南、大阪府吹田市の吹田南幼稚園を訪れました。この園では、三クラスで異年齢学級保育¹⁾を行っています。普段から同じクラスに四歳児と五歳児が混ざって活動しているのです。この日は、中学校三年生が三クラスを訪問していましたから、一つの教室に保育者も含めてたくさんの方々がいました。一つの教室に保育者も含めてたくさんの方々がいたことになりました（観察者として小学校・中学校の教師、研究者もいました）。日常の保育とは違う、いわばハレの場ですが、この日の観察から、ここ何年かの研究テーマである「関わりあって学ぶ」ことにつ

いて考えを新たにすることができました。

中学生と幼児はどんな様子で活動を共にしていたでしょうか。まず資料からへ当日のおおまかな流れを抜粋します。²⁾

11時20分 各保育室に別れて入り、あいさつをする。一緒に「とんぼのめがね」をうたう。手話を見せてもらう。中学生に手話を教えてもらう。一緒に手話をしながらうたう。

11時40分 弁当の準備をする（机を出す。手洗いうがいをする）。中学生と一緒に弁当を食べる。

12時20分 弁当を食べ終わった子どもから中学生と一緒に遊ぶ。

13時 今日 的交流の感想を伝え合う。「アンパンマンのマーチ」の手話を見せてもらう。

めろん組では幼児三十二名に中学生が七名。中学生は教室の前に並んで、手話の「とんぼのめがね」を演じます。これを見ながらまねをする子どもたちの様子は真剣そのものでした。食い入るように中学生の動作を見ていることが、中学生の伝えようという気持ちをかき立てていました。

昼食時、グループの机に一人ずつ中学生が入ります。中学生が弁当を持参していすに座るのをグループの子どもたちが自然に待っています。「いただきます」が済むと、中学生も交えて好物の話や遊びの話で盛り上がりました。

さて遊びの時間です。三クラスとも三々五々園庭に

出て行ったのですが、中学生と幼児はどちらが誘うでもなく、混じって遊んでいました。すべり台、竹馬、連結三輪車、かたち鬼、ぶらんこ、砂場、など多様な遊びが展開されていきます。ある中学生とある幼児とが終始一緒にいるのではなくて、遊びの区切りがつくと幼児も次の遊びに移っていき、違う中学生とも遊んでいます。中学生もすべり台の上ですべていく子どもたちを送り出していかと思うと、竹馬に挑戦するといった具合に自在に動いていました。

終わりの会で感想を言い合う場面になりました。中学生から「話しかけてくれてうれしかった」「手をつないでもらってうれしかった」などの感想が出され、幼児からは「〇〇お姉さんとお弁当食べてうれしかった」「〇〇お兄さんとでんぐり返りして楽しかった」などが出されました。中学生も幼児も同じように「うれしい」といった感情表出に関わることを言っています。違ったことといえば、幼児は「〇〇お姉さん」と名前を言っていたことです。

共にあること

前述した活動概要の中から、印象に残るエピソードを記述します。

中学生の女子Mさんは、はじめは、幼児と一緒にすべり台ですべって遊んでいました。そのうち、五歳児のRくんと四歳児のHくんが小さなバケツに「ご飯」を作り始め、それをMさんも一緒にやることになりました。「何作るの」「ご飯」「ええ、さっき食べたばかりじゃない」「おいしいの」など、先ほどから一緒にいる者同士ならではのやりとりをしながら、小さなバケツに水と砂を交互に入れてはシャベルでかき混ぜていきます。年長のRくんが「砂持ってきて」「混ぜて」と指示を出して、年少のHくんが素直に指示に従って行動するというパターンで遊びが進んでいました。バケツにご飯らしきものが出現したころ、RくんがHくんに「これに水入れてきて」と言いました。それは観察者の私には「わっ、Hくんには重くてちよっと大変

かな」と思うような指示でした。すると、そばにいたMさんがすつとバケツを持って、Hくんに「一緒に行こうか」と言ったのです。遊びは中断することなく継続し、同じく観察者の中学校の先生に「ご飯か」と声をかけてもらえる出来映えとなりました。

Mさんの行動と言葉かけは、保育・教育に大きな示唆を与えてくれます。「共にある」ことの様相です。

「共にある」こととは、ここでは、同じ空間で同じ時間を過ごし、同じ活動をしている状態を指すとしみます。「共にある」とは次のようなことなのです。

・活動を一緒にしている仲間として自分ができることをする

・言葉のやりとりが非言語あるいは時間や空間に支えられ、実のある関わりを生む

Mさんの行動は手伝ってあげるとか、補助するとかいうことではありません。一緒に遊んでいる者のごく自然な振る舞いでした。それに対してHくんは一緒に水をくみに行く行動をもって応え、観察者の不安を払



▲共にある

拭して遊びは継続しました。このときMさんは、バケツを持つ行動とともに言葉で「一緒に行こうか」と言いました。少し前の「ええ、さっき食べたばかりじゃない」もユーモアたっぷりです。こうした文脈依存型の応答（その場の事物と言葉が直接結びついて発せられるという意味での）は、幼児の言語発達にとって大事なだけでなく、おそらくMさんのような中学生にとっても、人との関わりを生み出す大事な働きをしていると考えられます。

終わりの会でMさんは「遊んであげたというより遊んでもらったという感じです」と感想を話しました。この感想に表れているのは、先ほどの示唆の一つめの「活動を一緒にしている仲間」という感覚です。Mさんは、最後に幼児と一人ずつ握手をして帰る場面でRくんと握手するときに「ありがとう」と言いました。「ご飯」のエピソードを知る者には、心温まる場面でした。

この日、「共にあること」は異年齢・ハレの場で実

現しました。このことについては稿の最後で触れたいと思います。

〈「適応」したのは誰か〉をめぐって

幼稚園での観察について記述してきました。「共にあること」は私の研究テーマ「関わりあって学ぶ」よりもさらに包括的な概念です。「関わりあって学ぶ」を掲げて連携研究を進めたのはお茶の水女子大学附属幼稚園・附属小学校³⁾ですが、この研究の理論的な基盤の一つとして佐伯胖氏の関係論的な学びの構造を挙げておきたいと思います。佐伯氏が挙げている事例に学びながら、保育・教育において（保育所における保育、幼稚園を含む初等教育、あるいは広く中等教育をも視野に入れて考えます）「共にあること」を、臨床的あるいは実践的に位置づけていく途を探っていきたいと思います。

佐伯氏は、一九九〇年代に現場でかなり読まれた著書『学ぶ』⁴⁾といふことの意味⁴⁾の中で、保育者の目

から見て「ちよつと気になる」ケイ君の事例をひいています。いつも遅く登園するケイ君は、食事も着替えもみんなが終わるころに始めます。一刻も早く集団活動に参加させたい保育者は、自由遊びをしたいケイ君に表面は親切に実は強圧的に言葉かけをしますが、ケイ君はなかなか動きません。保育者の言動は保育園に一歳前後から通っている「古顔」の子どもたちに感受され、年下のクラスに行つてほしいといふつぶやき、すなわち保育者のケイ君に対する関わり方への同調反応を引き起こします。転機は、保育園の「新入り」とケイ君が遊ぶようになったことと、保育者間の合意「しばらくケイ君をほうっておくこと」によつて訪れました。ケイ君はいつの間にか「ちよつと気になる子」ではなくなつていきました。

佐伯氏はこのエピソードを刑部育子氏の論文⁵⁾をもとに、本質的な部分を変えずに若干のフィクションを加えてまとめた、としています。ケイ君が「ちよつと気になる子」でなくなつたとはどのようなことなのか、

刑部氏の論文では二つの事例によって記述されています。一つめは、Kが「古顔」の子どもと一緒に釣りの遊びをしたこと、二つめはKが自分から保育者に縄跳びを見せる行動をとったことです（ケイ君は刑部氏の論文では呼称Kとされています）。「新入り」の子がKの後について遊ぶことで、「新入り」もKも集団への参加のあり方が変わってきました。また保育者との関わりにも変化が生じます。「ほうっておく」ことが、保育者がKを見守るような関係を生み出すのです。そんな中でKは、以前なら自分から保育者に声をかけることなどしなかったのに、縄跳びを見せます。

佐伯氏は本エピソードをめぐって、『変わった』のは、ケイを取り巻く関係が変わったのだ。∴『適応した』のは、ケイに関わる人々すべて、とりわけ保育者だった」と述べています。関係論的視点では、何かをなす力、○○力は本人に帰属するという考え方をとらず、周辺の人々や世界との関係の中で「たち現れる」行動特性だと考えます。

刑部論文に対しては、後に意見論文⁶⁾が発表されています。その中で倉持清美氏は、「実践研究と問題の共有のための課題」として、「正統的周辺参加論⁷⁾」の言葉、すなわち「古参者」「新参者」などの言葉をそのまま保育実践に適用してよいのかという問題提起と、「ちよつと気になる子」ととらえる保育者の枠組みを問うことの必要性を述べています。これに対して刑部氏は、「正統的周辺参加論」は、「特定の個人の『心』の言及を控え」る立場だと応えています⁸⁾。

実践を進めていく立場からKの事例を見たとき、佐伯氏の言う「適応したのは保育者」を、丁寧に「Kがいる環境に適応し、新たな環境を創り出した保育者」と読み解きたいと思います。保育者はKとの関わり方の「何か」を獲得したのでしょう。倉持氏の指摘は「子ども理解」の枠組みにつながるものですが、保育者が環境を創出することは、関わり方の開拓、広い意味での教育方法の開拓につながっていると考えます。

一方Kを取り巻く関係が変わることで、Kの側では

何が育ったのかを見る目をもちたいと思います。保育

士・教員養成の学部三年生と、ケイ君のくだりを讀んだ際、「Kは全然変わってないと思うわ」という意見が出ました。一面で「あるがままの自分を認めて」という学生自身の声を聞いたように感じました。それは置くにしても「Kは変わらなくてよいのだ」と学生がとらえていたとするといささか違和感を覚えます。学生のとらえ方がやや一面的だったことは、授業では刑部論文にまで遡って読み合う機会をもてなかったことにも起因するかもしれません。確かに、もともともっていたものを発現させたととらえれば、「変容する」とか「育つ」という視点は後退します。しかし、たとえばKが縄跳びをしようとして、「ねえ、W先生見て」と言葉を発していることを、人と関わる言葉の発現あるいは獲得と見ることもできるのではないでしょう。関係論的な学びの構造を保育者、Kそれぞれがどのように内面化して（あえて言うならどのような力として）次の実践や学びを拓いていくかが保育・教育

の課題だと考えます。

「共にある」ことをいかに支援できるか

ここまでの考察を踏まえて、「共にある」ことの教育的な意味を確認したいと思います。縄跳びのエピソードでは、保育者は昼寝用のカーペットを敷きながら縄跳びを後で見えてあげるとKを受け入れ、着替えを促して結果を褒めています。同じ時間、同じ空間、そしてゆるやかに同じ活動が目指されています。Mさん、Rくん、Hくんは、教室や遊びが展開されたすべり台、その下の砂場で一緒に過ごし、「ご飯」作りといった活動を共にしています。「共にあること」がそれぞれの力を育てることに貢献していると考えられます（たとえば言葉の力についてはMさんたちの例でも、Kの例でも既に述べたところです）。

そして実践的にはどのようにして「共にある」状況を創り出し、「共にある」ことをどのくらい支援できるかという視点が大事です。たとえば、以下のような

視点が挙げられます。遊びに入れない子どもの周りの何をどのように変えるのかという視点。つまり、適応するのは保育者・教師と考えて人的環境も含めて周りを整えるということです。また、前述した文脈に沿った応答、すなわち今共にいる者としてどんな言葉かけをするのかという視点。保育者・教師と子どもたちが共に変わっていくための視点が大事です。前半に記述した活動は、中学生を含めた異年齢、日常保育と違うハレの場でした。異年齢活動がもたらすものについては知見の蓄積がありますし、ここでは触れる余裕ありませんが、異なる立場の者が逆に「共にある」ことを生み出す原動力になり得るのは今回の事例が端的に示すとおりです。異なる立場の者という考え方はむしろ日常の保育・教育にこそ必要だと考えます。同質性をよしとする風土において、むしろ同質性を打ち破る意味で「共にある」ことを支援するとはどういうことをさらに追究したいと思います。

(関西国際大学)

註

- 1 吹田市立幼稚園では、四歳児五歳児の交流を大切にした異年齢児学級保育とともに、必要に応じて同年齢児保育も行っている。
- 2 吹田市立教育センター国語力向上Ⅱ研究グループによる研究の一環
- 3 文部科学省研究開発指定校二〇〇一年度～二〇〇三年度「関わりあって学ぶ力を育成する教育内容・方法の開発」。筆者はこの間、同校に勤務していた。
- 4 佐伯胖『学ぶ』ということの意味『岩波書店 一九九五年
- 5 刑部育子「「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析」『発達心理学研究』第九巻、第一号 一九九八年
- 6 倉持清美「保育的視点から刑部論文(一九九八)を読む」『発達心理学研究』第一巻、第三号 二〇〇〇年
- 7 「正統的周辺参加」(Legitimate Peripheral Participation 通称「P」とは、学習を文化的実践に参加していく過程ととらえる考え方。ジーン・レイブ／エティエンヌ・ウエンガー 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』(産業図書 一九九三)に詳しい。
- 8 刑部育子「刑部論文(一九九八)に対する意見論文にこたえて」『発達心理学研究』第二二巻、第二号 二〇〇一年

運動発達を阻害する運動指導

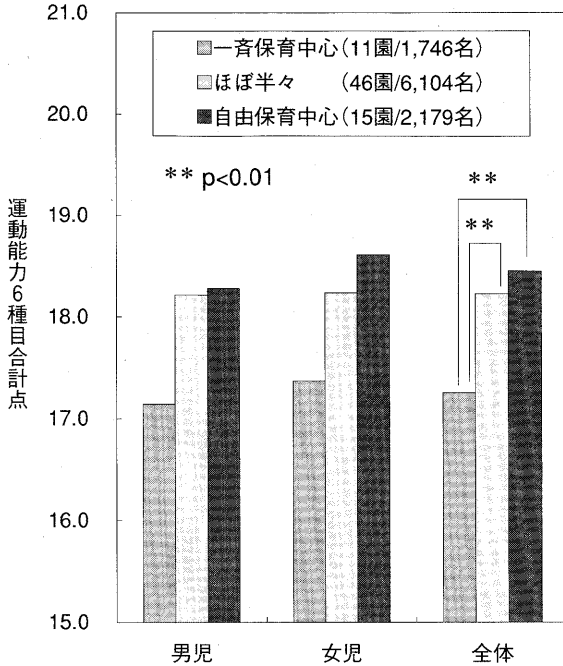
杉原 隆

近年、文部科学省の調査結果から、児童・生徒の体力・運動能力の低下が明らかに、社会的に大きな問題となっていることは皆さんご存じのとおりです。筆者たちが行ってきた幼児の運動能力の全国調査からも、一九八〇年代の半ばから九〇年代の半ばにかけて、運動能力が大きく低下していることがはっきりと示されています。そして、それらの原因として子どものライフスタイルの変化、中でも戸外で活発に体を動かす運動遊びの減少があることが指摘されています。このような状況を受けて、園でも体力・運動能力を向上させる試みが広く行われるようになってきました。そこで、二〇〇二年の

全国調査では園と家庭の環境調査も合わせて実施し、運動能力発達との関係を調べたところ、園での指導に参考となる大変興味深い結果が得られました。明らかに変わった客観的な科学的根拠に基づいて、幼児期の運動指導について考えてみたいと思います。

二〇〇二年の調査では、北海道から沖縄に至る全国の幼稚園72園、保育所37園の計109園、四・五・六歳児約一万二千名を対象として、運動能力の測定と園の環境調査を行いました。種目は25m走、立ち幅跳び、ボール投げ、連続両足跳び越し、捕球の六種目です。個人の記録を各種目とも男女別・年齢段階(半歳)別に五段階の標

準得点に変換し、種目、性、年齢を込みにした合計点で直接比較できるようにした結果を示したいと思います。つまり、運動能力を総合的にとらえた四〜六歳の幼稚園児全体に当てはまる結果ということです。



▲図1 幼稚園の保育形態による運動能力の比較 (杉原、森、吉田)

保育と運動能力の発達

まず指摘しておきたいことは、園の保育形態によって運動能力の発達に違いが見られたことです。幼稚園と保

育所では子どもの活動がかなり異なるので、幼稚園だけを取り出したデータを図1に挙げました。これを見ると明らかのように、一斉保育中心で保育をしている園が、自由保育中心の園や両者ほぼ半々の園より運動能力が低いということです。さらに、保育の一環として園で行っている運動とその頻度について聞いたところ、運動の内容は表1(19頁)のようになりました。幼稚園と保育所とで行われている運動は少し異なり、幼稚園では体操、水泳、縄跳び、器械運動が多く、サッカーやマラソンも約四分の一の園で行われています。これらの運動が行われている頻度と運動

能力の関係を見たのが図2です。

これを見て「えっ」と思われる方は多いのではないのでしょうか。まったく運動を行っていない園が最も運動能力が高く、よく運動を行っている園ほど低くなっています。しかも、その差はかなり大きなものです。なぜこのような結果が得られたのでしょうか。それは保育を観察するとすぐわかります。

一斉保育中心の園では、運動が一斉指導のかたちで指導されており、子どもは同じ動きを何回も繰り返し行います。さらに、子どもが順番を待ったり指導者の説明を聞いたりしている時間が長く、実際に体を動かして運動している時間が少ないのです。

これに対して、遊びに対する配慮が十分になされている園では、多くの子どもたちは保育時間中に活発に体を動かしてさまざまな動きをしています。このような活発でさまざまな動きの経験が大切なことは、自由な遊びのときに運動遊びをする頻度の高い子どもほど運動能力

が高いという結果からも示されています。

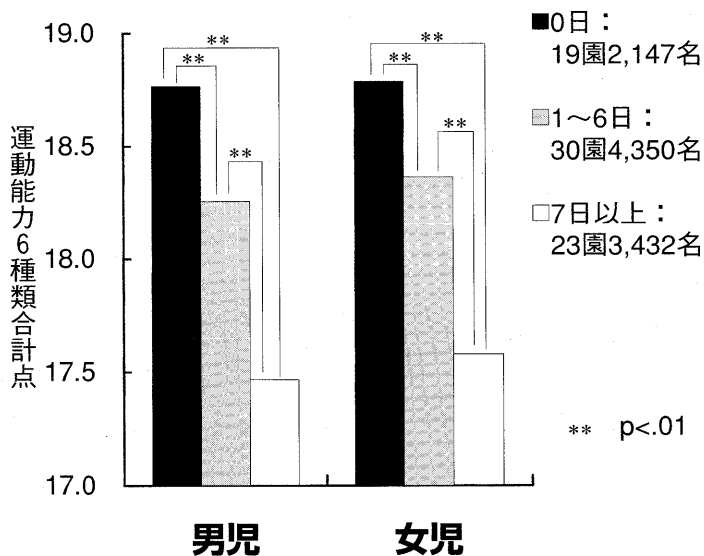
運動指導をすればするほど、幼児の運動発達が阻害されるという皮肉な結果になる原因はそれだけではないと考えられます。つまり、決められた運動を一方的に繰り返しやらされるため、運動遊びに対する子どもの意欲が低下してしまい、自由に遊んでいいときでも活発な運動遊びをしなくなってしまっているのではないかと考えられます。保育者も自分の園では運動指導をしっかりしているので大丈夫という安心感があり、運動遊びに対する配慮が欠ける傾向があるかもしれません。いずれにせよ、子どもの体力・運動能力を向上させようとして行われている指導が、その方法が適切でないためにかえって発達を阻害しているということは残念なことです。

発達に応じた指導

それではどうしてこのような誤った運動指導が行われるのでしょうか。その背景には大きな二つの根があると

表1 保育の一環として行っている運動（複数回答）
（杉原、森、吉田）

	幼稚園（72個）	保育所（37個）	合計（109個）
	園数（%）	園数（%）	園数（%）
1.マラソン	17 (23.6%)	11 (29.7%)	28 (25.7%)
2.サッカー	20 (27.8%)	13 (35.1%)	33 (30.3%)
3.水泳	32 (44.4%)	15 (40.5%)	47 (43.1%)
4.体操	44 (61.1%)	21 (56.8%)	65 (59.6%)
5.散歩	19 (26.4%)	26 (70.3%)	45 (41.3%)
6.野外活動	12 (16.7%)	11 (29.7%)	23 (21.1%)
7.縄跳び	29 (40.3%)	20 (54.1%)	49 (45.0%)
8.マット・跳び箱・鉄棒	29 (40.3%)	16 (43.2%)	45 (41.3%)
9.いろいろな運動遊び	8 (11.1%)	2 (5.4%)	10 (9.2%)
10.その他	18 (25.0%)	13 (35.1%)	32 (28.4%)



▲図2 運動指導日数による運動能力の比較(杉原、森、吉田)

思います。一つは、発達をどうとらえるかという問題、もう一つは、遊びをどうとらえるかという問題です。

発達に応じた指導ということに異議を唱える人はいません。しかし、具体的にどのような指導が発達に応じた指導かということになると、さまざまな考え方があります。前述のようなスポーツや体力づくり運動の一斉指導が行われる背景には、発達とは量的な増大であるという考え方が根強くあります。子どもは大人より体が小さい、力も弱い、知識も少なく物わかりも悪い。つまり、子どもは小さな大人、能力の低い大人だから、大人のやっている運動を小型化して易しくして教えることが発達に応じた指導だと考えるのです。その結果が、表1にあるような運動を指導者が子どもに一方的に教えることになるのだと思います。このような発達のとらえ方は非常にわかりやすく、保護者にも受け入れられやすいものです。つまり、保護者もこのような運動指導を望み、逆上がりができるようにしてほしいとか、サッカーを教え

てほしいといったことを幼稚園に求めがちです。

しかしながら、発達の本質は質的な変化にあるということは発達心理学の常識です。ただ、質的な変化は非常に複雑でわかりづらい

上、遊びを通しての指導が子どもの発達の特徴に応じた指導であることを主張しても、これまで遊びの教育的効果を示す客観的な科学的根拠がほとんど示されてこなかったために、なかなか保育現場や保護者に受け入れられにくいという現実があります。19頁に示した図を見ていただければ、誰もが運動発達における遊びの重要性をはっきりとわかっていただけるものと思います。

遊びのとらえ方

縄跳びやサッカーが幼稚園で教えられるもう一つの背



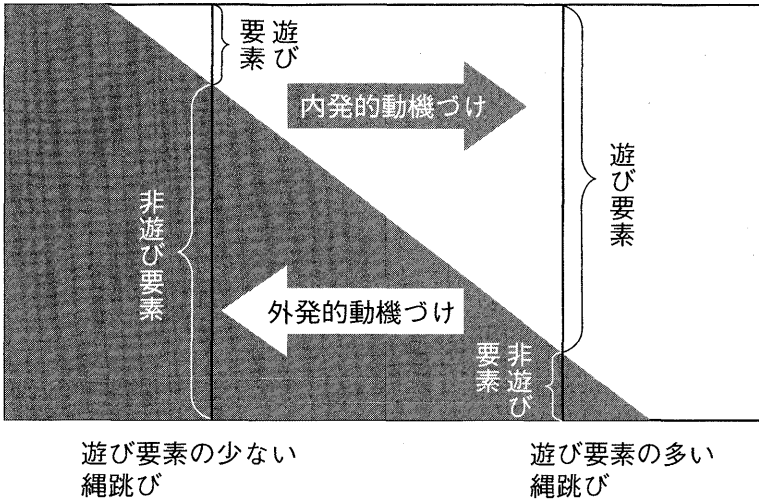
景には、縄跳びやサッカーは遊びであるという思い込みがあります。さらに、多くの人は遊びは自由気ままな気晴らしの活動であり、まじめで真剣な勉強や仕事の対極にあると思っています。このような意味での遊びは、教育と無縁です。遊びが教育にとって重要であると主張するためには、遊びとは何かを明確に示す必要があると思います。つまり、その遊びについての定義を聞けば、なぜ遊びが教育にとって重要なかがわかり、また、遊びを実践するにはどうすればよいかという指針が得られるものである必要があるでしょう。

このような視点から遊びの定義を考えたとき、非常にびつたりする遊びの定義があります。それは遊びを「自己決定と有能さの認知」を追及する内発的に動機づけられた状態であるとする立場です。自己決定をするということは自分らしく行動するということです。ですから、自分らしく個性的に自分の能力を向上させることに動機づけられて行動している状態が遊びだということです。こ

れはまさに教育の原点といってよいのではないのでしょうか。さらにこの定義からは、遊び指導は指導者が一方的に、行う運動ややり方を決めて教え込むのではなく、できるだけ子どもの自己決定を尊重するという実践上の指針が導き出されます。

このように遊びを内発的に動機づけられた状態であると考えると、遊びか遊びでないかは従事している活動から表面的に判断できないことになります。言い換えれば、水遊びをしているから遊んでいるとか、縄跳びをしているから遊んでいるといった判断はできないのです。子どもが、その活動をどのような動機で行っているかという内面を知る必要があるのです。

さらに遊びは、遊びか遊びでないかといった二分法ではとらえられないことになります。というのは、私たちはある一つの動機だけで行動することはまれで、通常は幾つかの動機をもって行動するからです。たとえば、内発的動機づけだけでなく同時に先生に認められたいとい



▲図3 連続体としてとらえた遊び（杉原，2000を一部改変）

う承認動機や、友達と仲良くしたいという親和動機をもつ状態はしばしば見られます。ですから、遊びはどのくらい内発的動機づけが強いかという連続体としてとらえられることとなります。この関係を模式的に示したのが図3です。遊び要素が内発的動機づけ、非遊び要素が外発的動機づけということになります。できるだけ子ども自己決定を尊重することが遊びにつながるのです。

以上のように考えると、幼児期の発達の特徴に応じた指導とは、スポーツや体力づくり運動の斉指導ではなく、子どもの自己決定を尊重した運動遊びであることをはっきりと納得していただけたらと思います。

（東京学芸大学）

参考文献

杉原隆（編著）『新版幼児の体育』建帛社 二〇〇〇

生もご覧になったことと思います。新しいクラスで二週間過ごしていますが、寝かせようとすると必ず「僕は寝ないぞ」と言わんばかりの大泣きをします。泣き疲れて眠るのがA君のスタイルになってしまったと同時に、A君を寝かせるのはS先生、という意識がいつの間にか保育者の間にも定着していたのです。私は先輩のS先生が寝かしつけるのを見ていただけでした。

昨日、保育者の間でA君のことが話題となり、「二人の担任だけでなく、どの担任もA君を寝かせられるようになったほうがいい」と話し合ったのです。そこで、改めてA君との今までのかわり方を振り返ってみると、私は苦手意識から、お昼寝の場面を避けてきたように思えてきました。そして今日、ついに私がA君のお昼寝を担当することになったのです。A君は友達がどんどん布団に入り始める

と、サンルームに出て遊び始めたでしょう。もうお昼寝の時間だということが、わかっているのだと思うのです。

……ふたたび観察者から保育者へ

そうでしたね、A君は保育者たちの視線におかまひなしに、着替えをしてからも保育室と続きになっているサンルームに出て、機嫌よく一人で遊んでいました。給食も終わり、もう眠たくなった子どもは、布団に横になり始めていました。子どももの体は「トントン」している保育者もいます。寝かしつけている保育者たちの視線は、いつしかA君に集まり、その口ぶりから私は、A君を寝かせるのに保育者たちが苦労していることを理解しました。そのうちに、ベテランの保育者が「海宝先生、やってみる？」と声をかけるのが聞こえました。海宝先生は

「え、私ですか？」と戸惑ったような照れたような表情で答え、他児の世話を終えてから「Aくーん」と近づいて行きました。

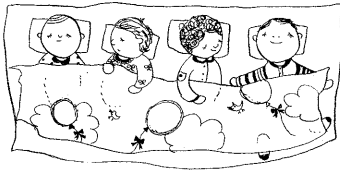
観ている私のほうが、どうなるのだろう、大丈夫だろうかとドキドキしてきました。これは重大な局面に出くわしてしまった、卒業生である保育者二年生の大きな挑戦の場に居合わせたことが、幸運なのか不運なのか、と内心かなり狼狽していました。でも、海宝先生は落ち着いて与えられた仕事に向き合っていましたね。もしかしたら、声のかかった瞬間に、覚悟が決まったのでしょうか。

……ふたたび保育者から観察者へ

前日の話し合いの後でもありましたから、確かに、「きた」「よし」と覚悟はできました。私は保育者としてまだまだ未熟なので、こんなふうは何で

も意欲的に「やってみよう」という姿勢で取り組むことだけは、自分に課しているような気がします。だからもう、A君のお昼寝から逃げることは、自分に許せなかったのかもしれない。それに、人一倍体をたくさん動かして遊ぶA君にはお昼寝は必要なことだし、目覚めてからまた遊び始める心地よさも知ってもらいたいと思っていました。

私は「A君ねんねだよ」と声をかけましたが、A君はにこにこしながらご機嫌で遊び続けていました。それで私は、無理にすぐ寝かせようとは考えないことにして、少し遊ばせておこうと決めました。A君はお昼寝の時間だということがわかってはいるはずなので、そこに、寝かせよう寝かせようとする



る保育者がそばに居るより、少しの間好きなことをして気持ちを鎮めたほうがいいのではないかと考えたのです。二十分くらいたち、他児が寝静まったところで、私はいよいよA君の所へ行きました。本当に覚悟ができたのは、この瞬間だったかもしれませ

ん。

私はA君を抱きましたが、やはり泣いて体をバタつかせます。サンルームで話しかけながら様子を見ていると、徐々に泣きも落ち着き、目が閉じてきました。しかし、布団が嫌いなA君は布団の肌触りに敏感で、私が床に座りA君を布団に下ろすと、途端に泣きだします。トントンされるのも嫌うことを知っていたので、私はA君のおなかにそっと手を当て、寝入るのを待ちました。やがて寝息をたて始めましたので、私のひざののっていたA君の脚をそっと布団に下ろしました。

このとき私は、一步A君に近づけたような感じを覚えました。これまで、「なぜ寝ないのだろう」「寝ている子を起さないで」という思いがA君を見る私のどこかにありました。今日A君の寝顔を見ながら私は、「午後からまた元気に遊んでね」と思いました。こんなふうに思える自分が、やはり今までとは違う、A君との関係が違ってきていると感じました。子どもと深くかわるほど、心苦しい経験もします。でも今になって考えると、それを避けていたのでは今日のような経験もまた、決してできないのでしようね。

A君を受けもつようになって二週間になります。嫌いなお昼寝を好きになってもらう、あるいは一日の生活の中の自然な流れとして受け止めてもらうことは、一朝一夕にはできません。A君自身にとっても保育者にとっても、まだまだ長い道のあるで

六人の地域の宝が集う場所

金澤 妙子

子どもの表情に惹かれて

ゆずシャーベット―頂き物であるが、ここ十年来、わが家の夏の風物味になつてゐる。あるとき、それに同送されていたはがきに、そのことを記すと、丁寧な返事が来て、パンフレットが届くようになった。この夏、そのパンフレットのメインを飾つた三歳児がいた。女の子の脇にはへ正真正銘古座川町のひなた、男の子の脇にはへ正真正銘古座川町のようにすけとある。

ひなたちゃん、ピンクの髪飾り・ピンクと白のポロダッシュヤツ・ジーンズ地のスカート・ピンクの靴下に、ピンクのスニーカー姿。手にはへ柚香ちゃんゆかを持つてゐる。へ柚香ちゃんとは、この地の特産柚子と、この地を流れる清流古座川の水で作つてゐるジュースの名称で

ある。小さな二の腕から手にかけて、まだどこかふつくらとして乳児の名残が感じられた。へ保育所お休みになつたよ。はずかしいけどがんばるから、後で柚香ちゃん飲んでいい？とある。まあ面白い顔にふくらしたはおは少し紅潮してゐるようにも見えて、緊張しながらも大人たちの要求に一生懸命応へてゐるように思われた。

ようすけくんはサッカー日本代表のユニフォーム、半パンツとスニーカーの白がまぶしい。へなんか、ぎょうさん人いて俺、ヒーローみたいやなあ。こうか。こうしたら、ええんか。どや、きまつたやろ。はよ撮つてや。の言葉のせい、いつもと違つて大勢の撮影関係者の前で、舞い上がつてゐる様子を想像させた。

製作者にのせられてゐるとどこかで自覚しつつも、子どもの表情は、こちらの想像によるへ緊張やへ舞い上



そんなこんな 古座川の 夏だより。

保育所お休みの
なつたよ。
はつかいけど
かんはるから、
後、地帯ちゃん
飲んでいる？

なんかきょうさん大いして
焼ヒ一口みたりなあ
ごうか
こつしんええんか
とやままだやう。
はよ通ってや。

はつて
おひでん
かんはるから、
後、地帯ちゃん
飲んでいる？

▲訪問のきっかけになったパンフレットの二人

がり〜も含めて私にはとても魅力的で、この子たちは、周囲のみんながどこの子か知っている地域の中で育った子だなーと思われた。どんな所・どんな人の中で育っているのだろう…などと思いは膨らんで、パンフレットを手がかりに、この二人が通う保育所を探して出かけたのだった。

同じ県の保育者で、この保育所がある集落近くにお母さんの実家があるというHさんが、同行を買って出た。朝からの見学に備えて、前日、保育所の近くまで行き宿泊したが、多少の土地勘があるHさんと、「野菜はともかく、肉や魚はどこで買うのだろうか」「小学校や中学校にはどうやって通うの?」「高校は宿泊しなければ通えないのでは?」などと勝手に心配した。

みんなで六人、その保育の様子

町の人口は約三七〇〇人。その奥地七十戸ほどの集落に保育所はあり、五歳児二人・三歳児三人・二歳児一人が、三人の保育者と共に生活している。指定された九時

三〇分近くに伺うと、緊張気味の保育者が出迎えてくれた。

園児はまだ二人。十五畳ほどの部屋の楕円形のテーブルで絵を描いている子がいる。日さんがその子を、「ようすけくんじゃないかな？」と言うので本人に聞いてみると、「うん」という返事。見知らぬ人が来たからだろう、子どもは、私たちが誰なのか、何しに来たのかと聞く。「ようすけくんがへ袖香ちゃん」を持って写った写真を見て来た」と話すと、「柚子のジュースは、100パーセントほんまもんやよ」と五歳児。ようすけくんは撮影にまつわると思われる(事実ではないことが後からわかったが)ことなど、たくさん話してくれる。

そういうするうちに、パンフレット撮影時より、少しすらりと引き締まった感じではあるが、ひなたちゃんとおほしき子も登所し、持ち物を所定の位置にかけたりしている。どこでも見られる登所後の子どもの姿である。それが終わると保育者の所へ行って、折り紙をもらって来て折ったりしていたが、玄関続きのマットが敷

かれているフロアーの大型積み木やブロックなどで遊びだした男児たちの所へ行く。テレビアニメの『プリキュア』に武器があるのかどうか私は知らないが、なりきったつもりで、自分で作った鉄砲状のもので保育者を撃つまねをしたりして遊ぶ。二歳児とそこはかとなく仲間関係があるようで「いこっ！ ○ちゃん！」と誘っていた。

あつという間に子どもは全員そろっていて、一人が壁の少し高い所に貼ってある自分の絵について話すと、それぞれが自分の絵を知らせてくれるので、必要に応じて抱き上げて説明を聞いた。

「基本的に、こんな感じで過ごすのですか」と保育者に聞くと、「そうです」とのことだったので、何となく、ずっとこうしているような気がしていたが、十時になると、お片づけの声がかかり、使っていた描画材や絵本や遊具を保育者と子どもたちで片づける。終わると、各自、壁際に並んでいるいすに着く。いすにはそれぞれのマークと名前がついていて、ここが部屋の自分の定位置・場所のようだ。保育者に促されて、当番二人が前に



▲朝の会のひとコマ



▲みんなでプールの水を最後まで楽しんで



▲歌をうたってお弁当。お弁当は持参。
お母さんは大変？ でも、子どもはうれしそう。

出て「起立」の号令をかけ、改めてみんなで朝のあいさつをし、出席をとる。壁にかかったカードで今日の日付・曜日を確認。保育者の弾くオルガンに合わせて、歌を何曲かうたう。その後、保育者がリードして場を変え、みんなでいくつかの手遊びを何回か楽しみ、本棚いっぱい絵本の中から何冊か読んでもらう。

保育者は、簡単なものからちよつと難しいかなと思う

ものを何冊か読んでいた。最後の一冊は『これはのみのぴこ』（谷川俊太郎・作 和田誠・絵 サンリード）。これを、最初保育者が読んだ後、二度目の途中から五歳児が読み、保育者はほかの子どもと一緒に見ていた。この絵本は、連続して漸増する言葉遊び的な要素が特徴的で、全部読み終えて、こちらがほっとした。二歳児もよく見ていてびっくりした。この二歳児も当番活動に興味

があつて、時には朝の会の当番をするという。易しい雑誌のときも、五歳児は退屈せずに中身を楽しんでいた。

選んだうちの一冊は保育雑誌で、へうたのえほんのページでは「おべんとうばこ」の手遊び歌を交えて二度読んだので短くない時間だったが、どの子も終始興味が薄らぐこともなく静かに聞き入っていた。

後にHさんは、「二歳児から五歳児なのでどうするのだろうと思つた」と言っていたが、保育者はいつも、易しいものと、ちよつと難しいものとを混ぜて読むようにしているようだ。

その後、子どもたちは体操をしてプールに入った。朝の会では（多分見ている私たちを意識して）、どちらがオルガンを弾くかで互いに譲り合っていた保育者も、このころには少し緊張がほぐれてきたように感じられた。

プールから上がり、トイレや着替えを済ませた子どもたちは、お弁当の入ったカバンを持ってテーブルを囲みだす。みんなでお弁当の歌をうたつてお弁当のふたを開けるまで見学した。

大正十五年生まれの私の父が九人兄弟だつたように、六人という数は昔なら兄弟数として多くはない。それでも、家庭における兄弟のような過ごし方で流れていくのではなく、一斉に朝の会をするのは、ここの保育者たちの保育（所）のイメージなのだろう。

子どもへの課題が、この保育所よりもっと多い園もあれば、登園してからお昼までずっと、思い思いに遊んで過ごす園もある。後者のように、遊びを通して子どもを育てていこうとする園では、どうあることが子どもにとって自然なことを考えて、保育者は心を砕く。園生活ですることになつていゝ事柄が、本当に子どもに必要なことなのかを一つひとつ検討したりする。その際、保護者の仕事の都合で園に来ているが、家庭にいたらどうかと考へてみることもある。低年齢ほど家庭との垣根はできるだけ低くと思つても、多くの子どもたちが集団で生活する場では、なかなか家庭にいるのと同じにはできないことが多い。

この保育所では逆だつた。どれほど自覚的にしている

のかどうかはわからないが、家庭と同じようにできるかもしれないところを（あえて）やらない。

私は普段、乳幼児の生活に、このようにわざわざ一斉に集まってあいさつを交わす必要性を感じない。だが、自分の場所に着いて保育者に向き合い、その促しに張り切って応じる子どもの姿、ちよつと「保育所ごっこ」のように見えなくてもその様子を見てみると、こうした経験がこの子たちに必要なことなのだと思う。こうした時間が子どもにもたらず誇りや一日の中でのめりはりが、何十人もいる園よりずっと際立って感じられた。

来年度は、卒園などで三人になってしまふという。町は、一人でも入所希望者がいれば閉所にはしないと云って来ているそうで、心強い限りだが、保育所の存続に關しては、人数の少なさなどから保護者にも気持ちの揺れはあるようだ。保育所はどうなるのだろうか。保護者が働く間、面倒を見てくれる人は、もしかしたらいるかもしれない。でも、そうではなく、保育所に通う「ハリ」みたいなものが子どもたちにあるような気がする。

今は、子どもの支援が多様化していい時代である。通りがかりの身ながら、旧来の保育所にとられず、自分たちの地域にあつた子育てサポートを実現できることを願っている。大事なことは、子どもにとって何が一番いいかということだろう。子どもは、こうしてもらうことが自分たちの育ちに一番いいとは言えない存在だから…。

私の郷里の市は、市町村合併を機に、やがて来る子ども数の減少を見越して、それまでその地域で集落に沿うようにあつたいくつかの園を閉園し、一箇所に大きな園をつくって、広域からバスで子どもを集めるようにした。いずれ減るとはいつても、現在百八十人も子どもがいては、「一人ひとりの思いを酌むどころか名前すら覚えられない」「行政は私たちの言うことなんて聞かないもの」と保育者は嘆いている。一家の兄弟数も激減し、地域の路地遊び集団も崩壊している現代に、家庭とはまた違った子どもの居場所の必要性はあるだろう。この子どもたちにはなおさらかもしれないと見学して思う。そ

れが住まいの近くに実現されたら、なおいいと思う。

運営は保護者が分担して

この園は、平成十二年に町立の僻地保育所として開所した。現在小学校五年生の子どもが、最初の入所児だそう。保育所運営のお金は行政が出しているが、保育者の手配、給与計算はじめ諸費用の収支など、実質的なことはすべて子どもの保護者がボランティアで分担しているという。

さまざまな計算や労働なら、面倒でも保護者が自分で買って出ることできるが、保育者として勤務することができるわけではない。保育者の手配と書くのは簡単だが、人自体が少ない地域で保育者を探すのは簡単ではないだろう。別の町から、曲がりくねった山道を片道四十分ほどかけて通ってくれている保育者もいる。

地域の方々と

見学を始めて間もなく、某新聞社の嘱託の記者さん

が、私たちの訪問を聞き、何かイベントがあるのかと取材に來られた。來所のきっかけとイベントではないことなどを話していた際、「お昼（ご飯）どうされますか。

よかったらうちでどうですか」と誘っていた。初対面であり、はじめは遠慮したが、「この辺り、食べる所ないですよ。うちは、よくしていることだからいいですよ」と言われ、伺うことになった。

見学後、私たちはパンフレットにある柚子関連の商品を買うため柚子加工所に行く予定だった。ひなたちゃんのお母さんもそこに勤務していて、私たちが案内するために、しばらくして迎えに来てくれ、まだ見学している私たちにつき合って、子どもたちが遊ぶ姿を見ながら、私たちの質問に応じてくれた。そのひなたちゃんのお母さんも誘われ、三人でお邪魔した。

昔懐かしいお宅の茶の間に、ずらりと並んだごちそうの数々。「何にもものうて」「家で採れた野菜料理ばかり」とのことだったが、記者さんのお母さんの手料理は、お世辞抜きで本当においしかった。

そのとき、運動会は近くの廃校になった中学校跡地で、小学生、地域の方と一緒に往くことや、大人のほうが断然多く、保護者は運営の手伝いで大忙しと聞いた。

先日のひなたちゃんのお母さんのメールには、「保育所の子どもたちも、運動会に向けて練習がんばっているようです。ちびっ子が多いので大したことはできませんが……」とあって、あのでこぼこした六人が一体どんなへ練習をしてることかと、ほほ笑ましく思った。訪れたとき、廃校した中学校の跡地は、時が止まったかのようで、かつてはここに子どもたちの声が響き渡っていたのだと思うと、やはり寂しいものを感じた。今は、保育所の子どもたちの声が聞こえていることだろう。

日々の、子どもさんからの生活の延長に運動会をつなげてと思っていながらも、運動会が近づくとどうしても形や見栄えを意識して、いつの間にか子どもを追いついでしまうという保育者に、「(親子で)体を動かすことを楽しめる機会があることは大切だと思うが、別に運動会がなくても……」と言ったこともある。しかし、運動会イ

コール当然やるものという日本の《運動会文化》の存在が、ここでは子どもたちの経験の幅を広げる機会になっているような気がした。

帰路、土産物屋で、日さんが苔玉(ミズゴケをまいて作った小さな盆栽のようなもの)を買った。それを作って卸しに来た方々が、お茶を楽しんでいた。ひよんなことから、「この子どもたちに会ってきました」とパンフレットを広げると、「ああ、○さんとこの」「うちの隣です」と言う。「来年のパンフレットも子どもでいきたいですね。ひなた&ようすけ四歳になりましたとか」などと(冗談を)言つて土産物屋を出た。

若者の多くはこの地を出て、戻つて来ない。でも、おばさんたちが明るくて、しょぼしょぼしていないのがよかった。温暖な気候は、自然に囲まれていれば食べていくのに困ることはないという自信を生むと思うのは、私が雪国に生まれ育ったからだろうか。去らない人の活力を感じた。過疎の里は元氣。

(大東文化大学)

保育者になつたころ (6)

「幼児の生活はあそびである」

堀合文子

昭和十五年、学校を卒業すると同時に母校の附属幼稚園に入れていただき、無我夢中で生活を始めてしまいました。これは誰でも経験することでしょう。病気で欠席の先生の組をもつことになり、その組をこわしてはいけないと、お子さんを通じて幼児教育を一生懸命探りました。講義室と附属幼稚園の保育室は隣接していましたが、学生るとき、授業の合い間にお子さんと生活していて、始業のベルの音で、あわてて教室へ戻ったことが今でも思い出されます。

その組のお子さん方が、どのような生活状態か、

それぞれのお子さん方の成長の違いを理解していなければならぬのに、それもわからないで夢中でお子さんたちと遊び、生活したものです。今振り返ると、若かったからできたのだと思います。それでもお子さんはずいついてきてくれ、今でも忘れられないお子さんでありがたいと思っております。

戦争という大きな時代に遭遇し、臨時に隣保幼稚園が開設されましたが、そのお子さん方も、検定で選ばれたお子さん方とは違った素朴さがあり、それぞれの生活はいまだに頭に残っております。

学生時代に倉橋惣三先生から伺った幼児教育のお

話の、「お子さんとよくあそぶこと」をそのままやりましたけれど、学校を卒業したてのころには、「ああ、楽しかった」「ああ、おもしろかった」だけに過ぎなかったと思います。

二年目、組の担任となり、自分でも、ただお預かりするだけの責任を感じるだけでなく、「これでもいいのかしら」「成長しているのかしら」と思うようになりました。

朝、「おはようございます」と会うその瞬間からお子さんとの生活が始まるので、無我になり、自分の体を使い、頭を使い、神経を使い、自分の全機能を使って生活をします。まず目で見て、次はどうしなければということを考えます。それは全員の斉行動ではなく、それぞれが皆違うわけです。そのころから一組の人数は三十人か三十二、三人で、それだけのお子さん一人ひとりに体を使い、頭、神経をつかうのです。

こちらが考えて言った言葉が受け入れられたりすると、とてもうれしいです。「それはがまんしてね」と言うことやめたり、違うことを考えたりしてくると「ありがとう」という気持ちです。

入園したばかりのお子さんには、これに「世話」が加わっているので、頭の中は大忙しです。

お子さんのほうは「おはようございます」と言うことから自分が好きな生活、あそびを始めていきます。何も思いあたらないのか、すぐ自分の好きなあそびに入らないお子さんもいます。それこそそれぞれで、あそぼうとしないからといって、やんやとせかしてあげる必要ありません。それにはいろいろの原因があるでしょう。せかせることが親切のようですが、それはわかりません。その点が難しいところでしょう。

お子さんと、先生の心のかよいあいは、こんなところにも表れてきます。

このように先生は、お子さんの生活を一挙一動、見逃さないように観察している必要があるわけですね。そうかといって、観察する一方で行動もおろそかにできないのですから、努力が必要です。若いうち、保育者になったころは、このことが大切であり、また大変な努力をせねばなりません。大変なことでしたが、このころに努力したことも、後になって、内容の深い保育をするための力になったのだと思います。

一緒に生活しているという安心感・信頼感が現代よりもあつたのでしょうか。私の若いころのお子さんのほうが、お友達とちゃんと遊び、生活をしておりました。また、年齢が進むと、世話ということもしだにお子さんのほうに戻り、先生は手があくという形になってきます。

あの時代は製作というの大きい行われていました。三歳、四歳時代は個人的に作りたいものを作る

ことが多く、一つのテーマをもってそれに向かっていく、ということはまだまだでした。五歳になると、「五歳だから」と、一つのテーマをもち、それに向かって皆で協力していくことが先生のほうの計画にも入ってきます。

たとえば、「おもちゃやさん」を作ろうとするときは、一か月くらいもかけて、やりたい人からおもちゃを作りためておいて開くのです。「おもちゃやさん」というテーマは、皆と相談して決めるのでなく、先生が決めていました。

この一か月の間も、お子さん方は相変らず、お友達と一緒に、自分たちでそれぞれが考えて生活しています。その中へこの製作を入れていくのです。先生のほうは、お子さんの生活を見つめ観察しながら、「○○ちゃん○○作ってくれる」と誘導してきます。「男の方いらっしゃい、これ作りましょう」というような言葉はこの時代から言ったことは

ありません。「お友達の○○ちゃんがやっているの、わたしも」「ほくも」と加わっていきます。

しだいに作品が増えてたところで机を並べて、そこに作品をのせて、お店のようにしていきます。すると、またそれを見て、「わたしも」「ほくも」とほかのお子さんもやりだし、商品はどんどん増えていきます。このあたりでお店を開きましょーと思ったら、ほかの組の方をお誘いしたりして開店いたします。お店の人、お客さんと、お子さん同士で役割を決めてやってくれます。

ある点は先生のほうが指示し、ある点はお子さんが主になると、先生もお子さんの世界に入り込み、一体となってやっていく形になっていきます。先生が先に出たり、お子さんが先になったり、との生活でした。

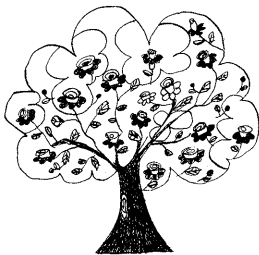
先生が指導すべきところは、はっきりと前に出てお子さんを引っばっていつております。製作につい

ては以上のようです。

本を読むとか、紙芝居を見るとかは組全体で一緒にしたことはありません。「読んで」と来た人に読んでいると、はじめは一人でも、「わたしも」「ほくも」と、しだいに増える生活形態は、現代と変わらないともいえます。もちろん、”お子さんの生活はあそび“ということは根本的には変わりません。

お子さんは、幼稚園に來れば、自分の生活を充分に生活しているわけで、これは年齢によってそれぞれ違うのです。

お子さんは生活していますが、先生は、「今日これを指導しよう」と、毎日計画案として、はっきりもっております。「お子さんの毎日の生活にどう入れていこうか」「計画し



たのだからこれはやらなければ」「やってもらわなければ」と、私の頭の中になりました。すらりと入れられる日があったり、なかなか好機がつかめずに神経を使ってしまう日もあったり、このことは先生の大きな仕事です。

音楽リズムのときは遊戯室をつかう時間が各組ごとに決められていたからですが、それこそ組全体と一緒にやりました。一斉にやるので、今のお弁当のときと同じように、皆を呼び入れます。先生としては、このリズムの誘導は楽なことの一つです。

誘導という言葉をつかってきました。前述したように、お子さんの“あそぶ生活”から誘導していくのは、ある技術が必要で、先生が一日の計画をしたからそこへ誘導すればよいというだけでなく、お子さんは生活しているのですから、先生の計画を入れていくというのは、この時代から難しい技術でした。

お子さん同士が、あまりにもよくあそんでいるの

を見ると、今日はこの計画があるのだけれど……と迷いながら、一日中お子さんの生活に流されてしまっただという日もありました。降園時間前に“おかえり”と聞いて、“あれ、今日は何もなかったなあ”という顔をしてお子さん方が部屋へ戻ってきたのを今でも忘れません。

このように就職をして手探りをしながら毎日を過ごし、いろいろな経験をいたしました。

社会・世界の大きな経験にも遭遇しながら、自分の保育の経験を進めてまいりました。偉大な経験は、公私共々ですが、保育経験の偉大な経験は、今考えても、ありがたいやら、恐ろしいやらの思いでいっぱいです。

倉橋先生の授業で“あそび”の大切を教えていただき、遊ぶ中で幼児教育が行われていることを私の頭の根本に入れていただきました。はつきりとわ

かつていたとは言えませんが、このことが実際に行われていた幼稚園に就職できたお蔭で、大変「幸」をいたしました。

初任時は戦争があり、大変な時代として過ごしてまいりましたが、その後は社会も進歩発展し、保育者としても、定年まで幸せに過ごすことができました。社会情勢を見ながらいろいろと変化はあり、変遷もいたしました。この保育を始めたころの幼児教育の原点——幼児の生活は「あそび」であるということ——が、いつの時代の保育にも変わることなく大切で、決して忘れてはいけないことだと、ひしひしと感じます。幼児教育がいろいろと変化しても原点は変わりません。

時代によって、そこに育つお子さんたちは違います。これは当然です。が、私も保育者は、この原点をつねに忘れてはいけません。そして、時代とともに保育の原点を利用していく必要があります。原

点を忘れた幼児教育は、幼児期の教育ではありません。年輩の私から若き幼児教育者へお願いと、期待をいたします。

昔のようにやってよいわけではなく、時代とともにそこに育っている幼児も違うので、現場では変遷の必要があります。これがいつの世にも保育者の大切な考えることだと思えます。

(十文字学園女子大学客員教授・

新現代幼児教育研究会)

註

- 1 東京女子高等師範学校保育実習科
- 2 太平洋戦争が激化し、昭和二〇年三月に幼稚園は閉鎖されたが、近隣の幼児を預かり、保育を続けていた。

☆このシリーズは今回で終わります。

保育の現場から

あかずきんごっこを楽しむ中で

篠澤 恵理

子どもたちは、何かになりきって遊ぶのが大好きです。同じものになったとしても、一人ひとりが違ったイメージをもっているので、楽しみ方が違っていておもしろいと思います。

次々にイメージがわいてくる子、友達のまねをしながら少しずつ自分の動きが表せるようになってくる子、なりたい気持ちはあっても恥ずかしかっている子など、さまざまです。

一方で、少しさめた感じで、なりきって動けない子もいます。「周りのことが気になっているのかな？ いろいろ考え過ぎてしまうのかな？」と思うこともあります。自分と違う何かになるの

は、ちよつとドキドキすることなのかもしれない。せん。

昨年度、二年保育の四歳児、二十三人の子どもたちと一緒に、十二月ごろから毎日楽しんでいた遊びをつなぎながらつくっていった劇遊びを振り返り、「何かになって遊ぶこと」について考えてみようと思います。

あかずきんの絵本を読んだことから

『赤ずきん』（グリム文 バーナデイト・ワッツ 絵 生野幸吉訳 岩波書店）の絵本を読んだ後、すぐに「あかずきんごっこしよう！」という

声が上がりました。今まで、『おおきなかぶ』
(A・トルストイ再話／内田莉莎子訳／佐藤忠良
画 福音館書店) や、『おおかみと七匹のこや
ぎ』(フェリス・ホフマン絵／瀬田貞二訳 福音
館書店) の絵本を読んだ後にも劇遊びを楽しんで
きたので、すぐに動いてみたくなったようです。
「あかずきんがいい」「おおかみがいい」など、
なりたい役を決めていると、「ねこも出てきてい
たから、ねこになる」とAちゃんが言いました。
思いがけないAちゃんの一言に「え? そうだっ
た?」と、みんなでもう一度絵本をめくってみ
ると、森を歩いている場面に小さなねこが描かれて
いました。「本当だ! かわいいね」と、みんな
で喜び、「ほかにもいるかもしれないから、もっ
と探してみよう」と言うので、もう一度絵本をは
じめから一ページずつめくってみることにしまし
た。「あ、ここでおおかみがあかずきんのことを

見ていたんだよ」と気づく子や、おばあさんに
りすましているおおかみの様子を見て「おばあさ
んを飲み込んでいるから、布団が膨らんでいる
ね」と、しみじみ眺めている子もいました。

結局、ねこ以外は見つけられなかったのです
が、細かくリアルに描かれている絵をじっくりと
なぞりながら見る機会となりました。見方を変え
ると、見えてくるものも違ってきて、絵本の楽し
み方が広がりました。

あかずきんごっこ始まる

「ねこも出てきたのだから」ということで、絵本
の内容に加えて、森の動物たちも出てくることに
なり、ねこのほかに、うさぎ、くま、ぞうなど、
自分のやりたいものをアピールして役を決めてい
くと、肝心なおおかみ役になりたいという子が誰
もいなくなってしまうました。「悪いやつだから

いや」と言うのです。

「先生やってよ」と言われ、おおかみをすることにしましたが、ふと頭の中で苦い経験を思い出しました。以前、三歳児学級を担任したときのことです。「三匹のこぶた」の遊びをしたときに、私がおおかみ役をやったのですが、ついつい怖いおおかみになり過ぎて、子どもたちを怖がらせてしまったのでした。

今度はそのようなことがないようにと、あれこれ考えて慎重にすると、ちよつときこちないおおかみとなってしまいました。考え過ぎるあまりに、役になりきって動けないでいる子の気持ち少しわかったように感じました。

男の子たちの人気を集めたのは「狩人」です。正義の味方のようなイメージをもつ子もいて、「今助けるからね」と言つて、ポーズをとりながら登場することが楽しいようでした。

終わるとすぐに「もう一回！」という声が上がりました。「どこへ行くの?」「お見舞いに」「気をつけてね」という繰り返しのやりとりが楽しかったようです。そして「また先生、おおかみやってね」と言われました。

私なりに演じたおおかみでよいと思つてくれたのかと思うと、少しほつとしました。私も子どもたちに励まされて、今度はもう少し楽しんでおおかみになろうという気持ちになりました。でも、「やっぱりおおかみになりたいと思う子はいないのかな?」と心配にもなりました。

いつもお母さん役?

Bちゃんは、劇遊びが終わるたびに私のそばまで来て、「次もお母さんをやるからね」と言いました。何度か繰り返して試してみても、やはりいつでもお母さんになります。お母さん役は、あかず

きんに「気をつけて行ってらっしゃい」と言うくらいしか出番がありません。それでいいのかと意外に思っただけでみると、「おおかみに食べられたくないの」ということでした。

狩人になった子どもたちも、「食べられちゃうのより狩人がいいよ。助けるのがかっこいいよ」と言うのです。『おおかみとこやぎごっこ』をしたときも、時計の中に隠れたやぎになりたいという子が多いのと同じなのかなと思いました。子どもたちは、「またやりたい」と言って、『あかずきんごっこ』をしたがるのですが、やるたびに動物になりたいという子は減っていきました。



「うさぎになりたいけど、食べられちゃうのは怖いな」と言う子もいたので、「おおかみが、『後で食べよう』と言って、みんなを奥の部屋に閉じ込めることにしようか」と聞いてみると、「それがいい！ それならうさぎになる」と、動物人気が復活しました。

それまで楽しんできた「おおかみとこやぎの鬼ごっこ」も「あかずきんの鬼ごっこ」としてリメイクしました。

「おおかみさん、どうしてお口が大きいのか？」お前を食べるためにさ！」などと、鬼遊びの陣地から逃げる前にやりとりすることが楽しくなると、おおかみの人気が急上昇！ 強そうに、怖そうに、なりきって動く子が増えてきました。狩人になりきって、おおかみにつかまった子を助けることも楽しいようで、繰り返し遊びました。

少しさめた感じで、なりきって動けなかったC

君も、鬼遊びのやりとりの中では、構えがなくなり、伸び伸びと動くようになっていきました。

そして、『あかずきんごっこ』としてこの鬼遊びの要素も加え、オリジナルの話をみんなで考え、ていくようになりました。

レスキュー隊も『あかずきんごっこ』に？

ちょうどこのころ、毎日楽しんでいる遊びに、『レスキューごっこ』がありました。大きくなったらレスキュー隊になりたいというD君の影響で始まった遊びです。

中型積木で消防車を作って乗り込み、後ろにクレーンに見立てた縄跳びの縄をぶら下げて、誰かを救出しているつもりになって遊んでいました。園帽子をレスキュー隊の帽子にしてかぶっているのです、レスキューの意味がわからない子も、同じ帽子をかぶり、縄を手を持つことから始めて、少

しずつ遊びが広まってきました。縄は、時には消防隊のホースになって火事を消し、時にはレスキュー隊の酸素ボンベのチューブとしてペットボトルにつなげて背負って歩くなど、『レスキューごっこ』の必須アイテムとなりました。

ある日、あかずきんの鬼遊びをしていると、レスキュー隊が、おおかみにつかまった子を助けにやってきました。それがとてもおもしろくて、とうとう、『あかずきんごっこ』の劇遊びの中にも、レスキュー隊が出るようになりました。レスキュー隊が出ると、「狩人はどうなってしまおうだろうか？」などなど素朴な疑問が出てきました。話が、話のつじつまを合わせながら、毎日やりたい内容に合わせて話の流れを変えて、ワクワク（子ども）ドキドキ（私）楽しんできました。

二月初旬の生活発表会では、この劇遊びを保護者に見てもらいました。また、生活発表会の翌日

にも「きょうもやろうね」という声が上がりました。発表会がゴールでなく、まだまだ続けたい気持ちになったことは何よりでした。

子どもたちが、お話の世界に入り込み、自分と違う何かになって遊ぶことについて振り返ってみると、改めて一人ひとりがさまざまなことを味わっているということがわかりました。

絵本の中にある小さなねこを見つけると、すぐに自分も絵本の中の一員になれるAちゃんも、いつもお母さん役になって、おおかみに食べられてしまうのが怖いと思っていたBちゃんも、絵本の世界に入り込んでいるからこそ感じたことなのだと思います。C君が、何となくのりきれないでいたときに、私は、「どうしたらなりきって表現できるのかな」などと思ってしまいました。C君なりに、鬼遊びを通して何かになる楽しさを感じ

ていたのです。直面しているときは、必死に進めていくことばかりに気持ちが向いていたので、今こうして振り返ってみると、一人ひとりの感じ方に、私がどれだけ心を向けていけるかを試されているような気がします。

自分と違う何かになったときには、今まで見えていなかった世界が広がっていくのかもしれない。ドキドキしたり、ワクワクしたりしながら、新しい自分に出会えることもあるのかなとも思います。繰り返し楽しんできた遊びは、一年がたとうとする今、一人ひとりの心の中にどのような残っているのでしょうか？そして、今年は劇遊びをつくり上げていく中で、どんなドラマが生まれるのか……。目先のことに追われる気持ちを抑えながら、おもしろがって見つめる目を忘れないようにしたいと思います。

(北区立さくらだ幼稚園)

子どもと保育の情景 (14)

「ううう、ううう、考えた！」

戸田雅美

登園から一時間ほど経過した四歳児の保育室では、さまざまな遊びが所狭しという感じで展開されていった。

そんな保育室の、ままごとの遊具のある近くでは、ゆうかとまいがままごとをしていた。積み木で玄関や間仕切りを作つてあるところを見ると、二人は熱心におうちを作つていたらしいことが見て取れた。

しかし、今はままごと遊びの展開がいまひとつ楽しいものになっていないらしい。ゆうかが「あの人形（ぬいぐるみ）をもつてこよう！」という

と、二人でぬいぐるみを取りに行き、おうちに連れてきたものの、特にそのぬいぐるみで何をするというのでもない様子だった。何かを言い出すのは決まつてゆうかで、まいは、いつも「そうだね！」とうれしそうに一緒に動いていた。私は、こんな具合にまいに受け止めてもらえるから、ゆうかは楽しいのだろうな…と思いつつ見えていた。

しばらくすると、まいもさすがに退屈になってきたのか、「ねえ、この人形で人形劇やらならない？前にやった続き！」とゆうかに誘いかけた。そういえば、ぬいぐるみは、手にはめて人形劇ができ

るようになっていゝるもので、そのぬいぐるみがあつた近くには、子どもが舞台代わりにできそうな手ごろな衝立が置いてある。きつと、最近このクラスの子どもたちが遊ぶので、環境として用意してあるのだらうと思ひ当たる。

ところが、ゆうかは「じゃ、ままごとはどうするの？」と、人形劇という提案にはのりきれない様子である。まいは「人形劇はお仕事で、このうちに帰つてきて、ご飯食べたり寝たりするつていゝのは？」と答える。なるほど、いい考え…。けれども、ゆうかは即座に「だめ！ そんなのつままない！」と答える。「でもさ、この前みたいに、キツネの誕生日つていゝのやろうよ。ゆうちゃん、キツネでさあ…」とまいは粘る。でも、ゆうかは「やだつてば！ きょうは、ままごだけ！」と動かない。

ゆうかは、なぜこんなにも抵抗するのだらう？

ままごをこんなふうに進めたいというアイデアも特にならゝいように見えるし、ゆうかの答えを聞く限り、人形劇をやりたくない特別な理由があるようにも思へない。もしかしたら、自分の提案ではなく、まいの提案だから、すんなりとうなずく氣持になれないのかもしれない。

その後も、まいは何度も何度も説得を試みていたが、相変わらず、ゆうかの答えは「だめ！」といゝものだった。私は、まいの粘り強さに驚くとともに、何だかまいが氣の毒になつてきた。

すると、突然まいが、思ひ切つた明るい声で、「あつ！ いいこと、いいこと考えた！」と言ひ、「ねえ！ ゆうかちゃん、ちよつと来て！ いいこと考えたんだ！」と手を引いて、おうちから出た。あれほど抵抗してゐたのに、ゆうかは、まいのその明るい声に惹かれるように思はず手をつないでおうちから出てしまつた。ふうん、ゆう

かが、おうちから出たけど、どうする気だろう：と見ていると。

まいは、ゆうかの手を引いて、迷わず人形劇の衝立の所に行くど衝立を出して、「お客さん、ここに座ることにしよっか？」とゆうかに聞く。ゆうかは、「お客さんはこっちに決まってるよ。いす持ってきて！」と答える。まいは、「そうだね！」といすを運んでは、ゆうかに渡す。ゆうかは、いすを並べながら「もつと持ってきて！」とまいに言う。

動きが出てきたからか、ゆうかがリードする流れになったためか、ゆうかの表情がいきいきとしてきた。「もう、いしいよ！ 人形持ってこよう！」とゆうかが言い、まいと二人でおうちからぬいぐるみを持ってくる。「私、キツネで、まいちゃんが、ネコとウサギね」とゆうかが言うのと、「いいよ」と答えるまいもうれしそうだ。



MAORI

いよいよ人形劇が始まるころ、ちょうどきれいなバッグを完成させたところだったけいが、ふらつとやって来て、観客用のいすに座る。「人形劇見たいの？」とゆうかが聞くと、けいは「見るの」と答える。ゆうかは、けいに、真ん中あたりのいすを指差して、「そこに座ったほうがよく見えますよ」と、けいを移動させる。ゆうかは、ほかにもお客に来てもらいたい様子で、あたりを見回すが、みんな自分の遊びに忙しく、お客になりそうもなかった。その間も、まいは忙しく準備しながら待っていた。

私は、もし、このまま時間がたつてゆうかの気持ちが変わってしまったては残念な気がしてきた。

そこで、ゆうかから位置的には離れてはいたのだが視線を送ってみた。すると、ゆうかはすぐに私の視線に気づいて、「見たいの?」と聞きに来た。

「見たいなあ」と答えると、「じゃ、見てね」と走って戻る。

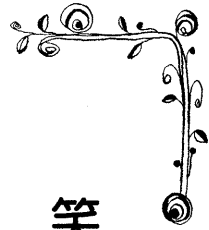
ところが、人形劇が始まってすぐ、けいが突然「おしっこ行く!」と立って行ってしまった。まいは、そのことに気づかずに人形劇に一生懸命なのだが、劇が始まってからも時どき客席をのぞいていたゆうかは、すぐにけいの不在に気づいた。動きが止まり、その瞬間ふつと私と目が合う。ゆうかは、慌てて続きを始め、そのうちにけいも戻り、無事に人形劇が進んでいった。

「いいこと、いいこと、考えた!」は、幼い子ど

もがよくつかう言葉である。しかし、まいのこの言葉のつかい方の見事さに私は驚かされた。おそらく、その前に試みていた「理を尽くした説得」もゆうかの心を動かしてはいたのだろう。しかし、理屈でわかっても、気持ちが動けなくなってしまうことは多い。そんなタイミングでの「いいこと、いいこと、考えた!」という言葉の響きは、ゆうかの気持ちの壁を飛び越えさせてくれるものだったに違いない。

それにしても、担任は、ゆうかについて「いつも遊んではいるんですが、どうも遊べていない気がして…」と言っていた。なるほど、ゆうかは遊びそのものに没頭しているというよりは、いろいろなことが気になって仕方がない様子だった。そんな姿から、担任の言葉の意味が少し理解できた気がした。

(東京家政大学)



発達心理学者の子育て奮戦記 (2)

笑 顔

長田 瑞恵

新米ママへのご褒美

出産後に職場復帰してから、私はよく、講義の中で乳児の発達の具体例として娘の話をします。

娘のことを話す私の様子が嬉々として見えるらしく、学生からは「先生は子育てが楽しそうですね」と言われます。

「子育てが楽しいか」と尋ねられれば、私は迷わず「とても楽しい」と答えます。もちろん、万事が万事、手放して楽しいわけではありません。娘

は日々成長し、変化し、私にいろいろな難題を投げかけてきます。しかし、いくら悩みが多くても、娘と過ごす時間は何よりも幸せなひとときであることには違いありません。中でも、ゆったりとした気持ちで娘の笑顔を見ているときは、とても幸せな時間です。

娘はよく笑います。一時期、人見知りもありましたが、一歳五か月を過ぎた今は、家族や保育士さんだけでなく、街角ですれ違う人々にまで屈託のない笑顔を向けています。いつもにこにことし

ているので、娘の写真の多くは笑顔のものです。そして不思議なことに、新生児のころの写真にも、眠っているはずなのに笑顔に見えるものがたくさんあります。

「新生児は笑わない」。正確に言えば、新生児は「うれしくて笑う」ということはないとされています。新生児の笑ったような顔、ほほ笑んでいるような顔は、「新生児微笑」と呼ばれる人間の赤ちゃんがもって生まれた自発運動の一つです。味気ない言い方をすれば、満腹でまどろんでいるときに、顔が勝手に笑っているような形になっているだけなのです。

講義で学生にこの話をする時、「あやしてもらうのがうれしくて笑っていると思ったのに……」「あの笑顔にだまされた……」と一様にショックを受けるようです。

確かに、新生児のころは本当の意味で笑ってい

るわけではありません。しかし、赤ちゃんのその顔を周囲の人々が「ほほ笑み」であると感じることに意味があるといわれています。本当は笑っているわけではない赤ちゃんの顔の動きでも、私たち大人は「私に向かって笑っている」と赤ちゃんの「心」「意図」を感じます。そして、赤ちゃんの「心」を感じ取るからこそ、さらに赤ちゃんをいとしいと感じ、ますます赤ちゃんへの働きかけを増やしていくと考えられています。このようにある意味では一方的な大人の解釈に基づいたやりとりを通して、しだいに赤ちゃんの中に本当の意味での「心」が育っていきます。それと同時に、親子の間にもさらに温かい人間的な絆が育っていくのです。

「新生児微笑」の正体について話しては、学生の素朴な誤解をうち砕いている私にとっても、やはり、新生児のころの娘の寝顔は私に向けられた

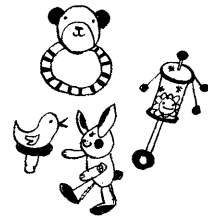
「ほほ笑み」であるように感じられました。そしてそれは、母乳を与え、おむつを替え、一日のほとんどの時間を娘のために使って過ごしている私への、娘からのご褒美のような気がしたものでした。

子育て・親育て

生後一か月半を過ぎたころ、娘は目が覚めて遊んでいるときに一瞬笑ったような表情をするようになりました。きれいな音の出るガラガラを目の前に出してあやしていると、口を縦に大きく開けてガラガラを見つめるのです。その顔は、それまでの新生児微笑とは明らかに違う、うれしそうなお顔に見えました。また、このころから、朝、ベビーベッドの中で目を覚ましてもすぐには泣きださないで、もぞもぞとしながら親が顔を出すのを待っているようになりました。そして、ベッドを

のぞき込んだ私の顔を見ると、これ以上のうれしい顔はないというほどの極上の笑顔を浮かべるようになりました。しだいに日中も笑顔が増え、機嫌のよいときには声を出して笑うようになっていきました。

このように娘が本当の意味で笑うようになってくると、私のほうもさらに欲が出てきます。「もつと娘の笑顔が見たい、娘の笑い声が聞きたい」と、思いつく限りのことをして、娘へのかかわり方を工夫するようになりました。歌をうたって聞かせると機嫌がよいので、娘の手足を軽く揺らしながら長い間うたって聞かせていることもありました。このころは娘のかんの虫がピークでしたが、私の働きかけに応じて娘が笑顔になると、小さな娘と人間らしいコミュニケーションが成り



立つようになったことが実感され、温かな気持ちになりました。

こんなふうにと考えてみると、親子関係の主導権を握っているのは、実は母親である私ではなく、生まれてからまだ日が浅い娘のほうなのかもしれない。私が一方的に娘の世話をして育てているというのではなく、娘が私に合図を送り、そのときの成長に必要な働きかけを私から引き出しているように思います。そして、娘の出す合図に気づいてそれに応えることによって、私自身もまた、母親らしくなっていくように思います。そういう意味では、母親としての私は、娘に育ててもらっているのかもしれない。

笑顔の源

よく笑うお母さんの赤ちゃんはよく笑うということを知ったことがあります。反対に、表情が硬

くあまり笑わない赤ちゃんは、お母さんもあまり笑わない場合が多いそうです。赤ちゃんは、とても小さいうちから、周りの人たちの様子をじっと見ていて、その表情やしぐさを写し取っていくようです。

私自身は「常ににこにこ」という性格ではないのですが、娘とはできるだけ笑顔で接しようと思ってきました。そんな私の心がけが功を奏したのか、単に娘がもともと陽気な気質だったのかはよくわかりませんが、娘は私の願いどおりによく笑うようになりました。

そんな娘が、一時期あまり笑わなくなってしまうことがありました。生後五か月過ぎのことです。あまり笑わなくなったばかりか、私と目を合わせようとしなくなっていました。

私は少々不安になり、娘の様子が変わってしまった原因をあれこれと探しました。発達関係の

専門書を取り出して、気になるケースに該当しないかどうかを調べたりもしました。

しばらくいろいろ調べ、考え悩んだ後で、私ははっと気がつきました。娘の様子が変わってしまった原因、その答えは娘が笑わなくなったタイミングにありました。それは、私が育児休業を終えて本格的に職場復帰したところからだったのです。

保育園が原因ではないことは明らかでした。保育園には私の職場復帰よりも前から馴染み保育をお願いし、職場復帰するころには娘もすっかりなじんでいたからです。

本当の原因は、母親である私の変化でした。職場に復帰したばかりの私の緊張が強すぎたのです。半年とはいえ職場を離れていたことで、早く元のように仕事をしなければという焦りがありました。そして、何よりも、娘に対してある種の負

い目がありました。「まだまだ小さい娘を預けて仕事に戻るのだから、私は仕事だけでなく子育てもきちんとやらねばならない。娘にとってよい母親であらねばならない」。無意識のうちに、強迫的に思い込んでしまったように思います。

このような私の気負いは、そのころの娘へのかかり方にも表れていたように思います。職場復帰した直後は、保育園から娘を連れて帰ると、一緒にいられなかった日中の時間を取り戻そうと、私のほうが必死になって娘と遊ぼうとしました。しかし、焦ってかかろうとする母親と遊んだところで、娘も心が安まらなかつたに違いありません。無理矢理にかかろうとする母親に対して、娘は笑わないことで抗議を示していたのかもしれませんが。

私は肩の力を抜くことにしました。娘を連れて保育園から帰ってくると、まずは娘と二人で一緒

に畳の上にごろごろと転がって休みました。休日
は私自身が休息をとるために、娘を連れて育児仲
間とおしゃべりをしに出かけるようにしました。

そうやって私が息抜きをしながらの生活を始めて
ほどなく、娘はまた、元のようによく笑うようにな
りました。

今でも時どき、娘があまり笑わなくなったよう
に感じるときは、実は娘が笑わなくなったのでは
なく、私のほうが娘の笑顔を心の底からかわい
いと思えるだけの余裕を失っているのかもしれない
ん。それは、たいてい、何かの理由で私が気負
い過ぎているときだからです。

「少ししい加減なくらいでいい。すべて完璧にな
って無理なのだから」

そう思い直して肩の力を抜き、気持ちに少し余
裕を取り戻したとき、娘に笑顔が戻ってくるよう
に感じます。私も、ただ無心に娘の笑顔をかawaii

らしいと思えるようになります。そして、また、
「子育ては、なんて楽しいのだろう」と、娘との
生活に感謝できるようになります。

「子育てが楽しい」と感じられるのは、そのこと
自体がとても幸せなことです。私ができるように感
じられるのは、家族や職場の同僚と先輩、友人な
ど、私の周囲の人々の支えがあつてこそだと思
います。そして、母親である私が娘との生活を幸
せに感じられるからこそ、娘もまた、これから続
く人生の楽しさを信じて笑顔で生きていけるのだ
ろうと思います。

毎晩、食後に大好きなフルーツをほおぼつて
は、くしゃくしゃの笑顔を浮かべている娘に笑
いかけながら、気負わず無理せず、いつまでも「子
育てが楽しい」と思えるように暮らしていこうと
思うのでした。

(十文字学園女子大学)

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (14)〉

保育者が伝える「保育実践論」

田中三保子

「保育実践論」という授業

私は今、大学で保育関連の授業をしています。その中に「保育実践論」という家庭科教員免許取得のための科目があります。ほかの科目と違って、この授業の受講生の中で保育に関心のある人はいつも少数派です。子どもに興味があっても、乳幼児と身近に触れ合う機会はあまりないようで、中には、子どもが嫌い、怖いという人もいます。

中学校や高校の家庭科では「保育」は選択科目だったようで、受けたという人でも覚えているのは、「子どもの発達段階（○か月にはどうなる）を

教わった」「子どもの喜びそうな玩具を考えて作った（実際にそれで子どもと遊ぶことはなかった）」「保育所に行って子どもたちと遊んだ」という答えがほとんどです。中高生と言えば思春期真っただ中、自分のことで手いっぱいな時期ですから、実際に触れ合う経験のないままに乳幼児の話だけ聞いても、子どもや保育に関心をもつには至らないのはいでしょうか。

家庭科教諭への願い

近年、「子どもたちが、言うことを聞かないから」あるいは「しつけのため」と称して、虐待され

たというニュースに頻繁に接するようになりまし
た。そういうことを聞いたときに、私は子どもが受け
た心身の痛みを思い、大人はもつと子どもについて
理解を深めてほしいと切に願ってしまいます。自我
の発達過程でのわがままや強情は子どもが通るべ
き道であり、そこから他者との調和のとれた関係が
はぐくまれていくのです。子どもには子どもの育ち
方がある、幼くとも、もう、その子自身の人生を
歩んでいるのです。

家庭科で「保育」を教える先生には、ぜひとも、
乳幼児の外見上の発達だけではなく、精神的な発達
の過程（個人差も大きい）も理解して、「保育」を
中高生に伝えてほしいと願います。そして彼らが、
その子その子らしく生きることを支え、それを喜
べる大人になってほしいと願います。幼いころから
大人の期待を一身に背負い、その期待に応えようと
頑張っている子どもたちを、「よい子」と見なす大
人にはなつてほしくないのです。

「保育」を、言葉を主な伝達手段にして相手に伝え
るのはとても難しいと、私は自分の保育経験から感
じます。家庭科の先生には、子どもが育つこと子ど
もを育てることを、知識だけでなく感覚的な部分も
含めてわかつてほしいのです。その感覚が根底にあ
れば、単に知識を中高生に伝えるだけの授業にはな
らないでしょう。

私の「保育実践論」

保育にあまり関心のない学生にも、実感を伴うよ
うな保育の伝え方をするにはどうすればよいので
しょうか。

私がかつて用いている方法の一つは、教育用ビデオ教材
の活用です。しかし、ビデオ映像は子どもの実態に
間接的ながら触れられる点では有用ですが、部分を
切り取りつなぎ合わせたものであるため、全体の中
での子どもや遊びのつながりは見えにくくなります。
しかも、制作者側の視点でまとめられています

ので、一回見ただけでは、そこに浮かび上がるストーリーに沿ったとらえ方になりがちです。そこで、同じビデオを続けてまた見てみます。ビデオの流れに沿いながらも、途中で止めたり巻き戻したりして、細かいところにも注意を払いながら見ることを繰り返します。そして、子どもが折々に見せるちよつとしたしくさや表情、発せられる言葉やそのトーンなどから、子どもの思いを推察していきま

す。またそこを基点にして、保育者の行為の意味を考えます。学生に意見を求め一緒に考えていきたいのですが、専攻学科も学年も異なる学生が集まるクラスでは、なかなか意見が出てきません。今のところは、私が説明することが多くなっています。

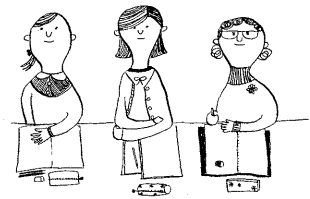
保育は、保育者と子どもや子ども同士の関係の中で、日々営まれていく行為の連続から成り立っています。一部分を取り出しても、当事者でなければ読み取りが困難なことも多くあります。しかし、私としてはそれを承知の上で、一つの解釈として学生に提

示しています。「ビデオの中の子どもの心情や先生の行動を考え、疑問をもちながら解説を聞くことで、たくさんのがわがり納得できた。解説の後再びビデオを見ることで、より理解でき、より印象に残った」と、ある学生はつぶつぶてくれました。

「実践論」としてのもう一つの教材は、保育者が書いた記録です。たとえば、子どもが集団生活から見れば迷惑なことをしたとき、保育者がそれをどうとらえ、どう対応したかを記録から読み解く作業をします。そして、「しかる」「あやまらせる」などの保育者がとる行動と、子どもへの影響について考え

ます。

「私がしかられるのが嫌いなのは、自分を否定されるのがいやだったんだと気づいた」「覚えている範囲で私はいろいろな先生に怒られてきたので、声を



荒げずに『行為』を注意してくれた先生がいたらよかったですのにも思った」「集団生活のルールなどを経験なしに教え込む場所ではないというのは今までの幼稚園観を覆すようなことだった。ルールを身につけることも大事だけれど、どのようにとというプロセスがとても大切。自分で納得していけないと思うのと、いけないと言われて守るのは大違い。納得するという過程を経ることの大切さを感じた」など、自分の体験を踏まえた感想がいろいろ出ます。

そしてもう一つ、一回だけですが、附属幼稚園見学は、学生の保育のとらえ方に大きな影響をもたらします。実際の保育現場では、映像で見たような場面がそこかしこで同時進行していきますから、子どものもつパワー、保育者の素早くて確かな動きを目の当たりにして、圧倒されたり驚いたり納得したり、学生それぞれに強い印象を残すようです。「幼稚園に行ってみたら子どもが欲しくなった」という学生もいます。もっと子どもと触れ合いたかったという

学生も、観察だからこそ子ども同士の自然なかかわり合いや先生の対応を客観的に見ることができたという学生もいます。

「感想」を書くこと

事例について考察したときには、授業の終了前に感想を書いてもらいます。目的の一つは、学生が「何となくわかった」で終わらないように、自分なりに学び取ったことを自覚し意識化してもらうためです。書くためには、自分の感覚に耳を傾け、ふざわしい言葉を探らなければなりません。その過程が学びをその人自身のものにしてくれると思うからです。もう一つの目的は、伝えたかったことが学生一人ひとりにどのように受け止められたかを、私が知りたいからです。保育者であった私には自明のこととして説明不足の部分があるかもしれませんが、私の意図とは違って受け取られていることもあるでしょう。それをきちんと把握し次回以降の授業に生

かしたいと思います。

「感想」を読んでいるとき、私はその学生と対話をしているような気持ちになります。思わずうなずいたり、「えーっ」と声が出てしまったり。でもその場で私の考えを返すことはできませんから、次回の授業の最初に、いくつかを紹介したり補足説明をしたり、疑問質問に私なりに答えたり、感想用紙を通しての対話が続くようにしています。「毎回私たちの感想に対して丁寧に解答してくださいるので、私の書くものもだんだん長くなってしまいます」という感想には思わず笑ってしまいました。

「感想」を読み上げるときには、名前は明かしていません。提出してもら回数が増えるにつれて、自分の負の体験に照らし合わせた感想が出てくるようになります。私は自分の体験から、保育を考えることは自分のありようを見つめることにつながると感じています。授業を重ねて、学生も私と本音の対話をしてくれるようになったのかもしれない。もし

そうだとすれば、私への信頼を裏切ってはいけないと思うのです。

授業の振り返りから見る

「保育」のとらえの変化

授業を終えてのレポートの中で、受講前と後との「保育」のとらえ方の変化について書いてもらいます。授業の積み重ねから、自分の学びをもう一度反すうし納得して自分のものにしてもらいたいからです。表現の仕方はいろいろですが、ほとんどの学生が、「保育」を、子どもを主体にしてとらえるようになった様子がかがえます。以下に、ある学生の書いたものを紹介します。

「前は、保育は子どもに何かを教えるようにすることと思っていた。今、保育とは、子どもの成長をサポートすること、子どもが卒園した後も自己実現に向かって努力していくことができ、自己表現ができるよう手助けすること、与えられたものをう

まくこなすことを教えるわけではなく、やりたいこととは何か、それを実行するにはどうすればいいのかを自分で考える能力を身につけてもらうこと、大人を信頼できるようにすることと考える。そのために保育者は、それぞれの子どもをよく見て、どんな手助けが必要かを見極め、実行していくこと。子どもはそれぞれが違うから、全体で『子ども』としてくくってはいけない。行動の裏にどんな感情があったのかを考えたり、普段どんなふうに遊んでいるのか観察したりすることが重要。子どもに大人の価値観ややり方を押しつけたりせずに子どもの主体性を大切にいかかわり合っていく。その中で信頼関係を形成していくことができればサポートもしやすくなる」

学生のひとつが、いわゆる一斉保育を受けてきているので、保育を受ける子どもの立場に立ちつつ保育する側の視点も理解して、子ども主体の保育を受け入れていくのは、そうたやすいことではないと思います。自分の受けてきた保育を、ひいては自分

自身を否定することにつながりかねませんから。

最後に授業全体の感想から紹介します。

「この授業を受けたことで、「子どもは欲しいけど子育てはいや」が「子育てもしてみたい」に変わったことは、自分の中で本当に大きかった」

「この授業を通して私が大切だと思ったことは、友達や親子関係などさまざまな人間関係に通じるものであると思う。その場しのぎで調子を合わせるのではなく、本当によいと思われるかわりをするほうがよい。相手の気持ちを考え理解しようとする姿勢をもつことが大切」

「とても楽しい授業だった。これは、先生が園児たち一人ひとりを大切にしていたのと同じように、大先生である私たちの考えや思いもそれぞれ大切にしてくれに伝えてくださったからだと思う」

手前味噌のようで恐縮ですが、私なりの授業への思いが通じたようで大変うれしく思いました。

(元幼稚園教諭)

編集後記

金澤先生のレポートには、子どもを活力にして町おこしをはかる大人と、それを淡々とこなす子どもとの関係が描かれている。大人ばかりが多くなる世の中の子どもの問題に保育学はどう応えていくのか…。

先日法事で、地方のある町を久しぶりに訪ねた。日曜の午後に駅に降り立ったのだが、十数年前に来たときよりもずっと静かで、駅前通りには車も人もほとんど見かけない。大通りを歩いていても、若い人、子どもには夕方までとうとう出会わなかった。タクシーの運転手さんに、小学校の児童数が減って併合がすすんでいることを聞く。それでも、裏通りには小さな駄菓子屋さんがあって、店頭のおでんのなべから湯気が立っていた。会えなかった子どものうごめきを感じた。(H)

幼児の教育 第107巻 第2号

平成20年2月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集部 河合聡子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円 (本体524円)
©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵 佐藤奈々
扉カット 佐藤奈々
扉題字 津守 眞
カット 斎藤明子
編集委員 伊集院理子
上坂元絵里

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

・特集 生活を保育へVol.6

—あいさつをするというこ—

前原 寛・砂上史子・宮里暁美



☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

★告知★

『幼児の教育』に掲載された論文・記事を、お茶の水女子大学附属図書館が管理する『TeaPot』(同大学資料公開ウェブページ)にて、インターネットで閲覧(2008年3月予定)できるよう準備をすすめております。

これまでに本誌に寄稿いただきました著者・関係者などで、ご意見などをおもちの方は、日本幼稚園協会までお問い合わせください。

創刊より100余年の歴史をもつ『幼児の教育』は、戦前戦後の日本の幼児教育界の推移を伝える役目を担っている雑誌と考えております。みなさまのご理解・ご協力のほど、誌面をもってお願い申し上げます。

連絡先 日本幼稚園協会
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1お茶の水女子大学附属幼稚園内

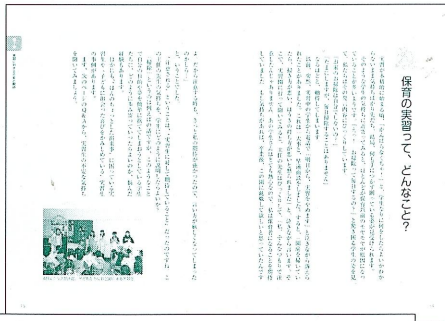
—子ども・実習生・保育者からのメッセージ—

育ちあう心 育ちあう姿

教育・保育実習研究会 編著

保育の実習を通し、子ども・実習生・保育者が、互いを尊重しあい、歩み寄ることの大切さを教えてくれます。

実習の初め、担任は、実習生との世代間ギャップや生活経験の差から生じるさまざまな問題に頭を悩ませ、指導法を模索していきます。本書は、保育者を育てることの意義や「大人と子どもが共に育ちあう」ことの大切さを綴った、実習現場からのメッセージです。若い保育者、実習生を指導するすべての方、保護者、実習生必読書として、おすすめしたい1冊です。

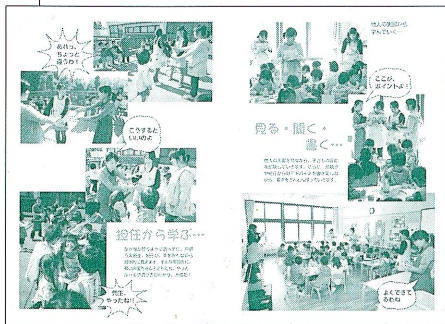


104-00

21×15cm/220頁
定価1,470円(税込)

もくじ

- 第1章 実習に対する不安と期待
- 第2章 保育の中の実習生
- 第3章 実習生と共に悩み、共に学ぶ
- 第4章 指導計画の立案
- 第5章 1日実習の体験
- 第6章 実習最後の日
- 第7章 座談会 保育者を育てるために



キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

フレーベル館 創立100周年記念出版

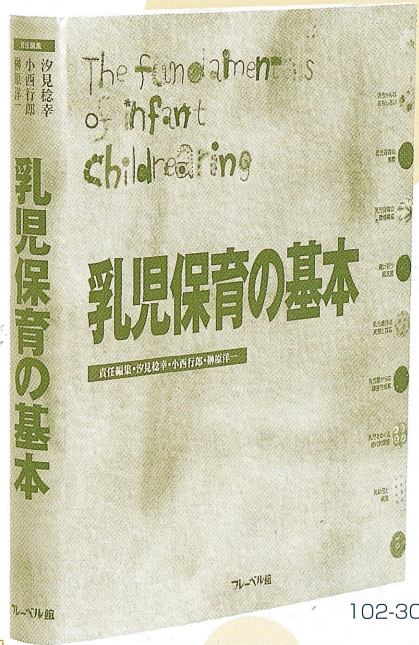
……幼児教育とともに歩んできた100年
そして未来の子どもたちを支える100年に……

乳児保育の基本

汐見稔幸・小西行郎・榊原洋一
責任編集

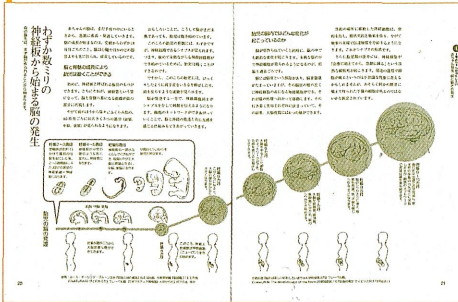
従来の乳児保育の経験的な「知」と、赤ちゃん学や脳科学などの「最新の知識」を融合させ、新しい乳児保育の姿を明示します。
ワイド版・全8章・512頁のボリューム、豊富なイラスト・写真・図版で、ていねいにわかりやすく説明します。

本邦初、赤ちゃん学・脳科学などの最先端知識を取り入れた、新しい「乳児保育」の実践・工夫を提案!!



102-30

27×22cm/512頁
定価4,935円(税込)



発達段階	0-3ヶ月	4-6ヶ月	7-9ヶ月	10-12ヶ月	13-18ヶ月	19-24ヶ月	25-36ヶ月
身体	頭を据え、寝返り、つかまり立ち、歩行	つかまり立ち、歩行	歩行、走り、登り降り	走り、登り降り、階段	走り、登り降り、階段	走り、登り降り、階段	走り、登り降り、階段
認知	物探し、追視	物探し、追視	物探し、追視	物探し、追視	物探し、追視	物探し、追視	物探し、追視
言語	喃声、母音	喃声、母音	喃声、母音	喃声、母音	喃声、母音	喃声、母音	喃声、母音
社会性	視線、微笑	視線、微笑	視線、微笑	視線、微笑	視線、微笑	視線、微笑	視線、微笑
情緒	不安、恐怖	不安、恐怖	不安、恐怖	不安、恐怖	不安、恐怖	不安、恐怖	不安、恐怖
遊び	視線追従、微笑	視線追従、微笑	視線追従、微笑	視線追従、微笑	視線追従、微笑	視線追従、微笑	視線追従、微笑

<もくじ>

- 1章 赤ちゃんはおもしろい
- 2章 乳児保育の実際
- 3章 乳児保育の環境構成
- 4章 園が担う親支援
- 5章 乳児虐待の実際と対応
- 6章 乳児期からの障害児保育
- 7章 乳児をめぐる現代的課題
- 8章 乳幼児と病気

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。